

1 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

元禄三年九月六日付の門弟曲水宛の芭蕉書簡に「うづら鳴くなる坪の内と云ふ五文字、木ざはしやと可有を珍夕にとられ候」と記されている。これは、

木ざはしやうづら鳴くなる坪の内 ㉠

という句を作ったが、初五文字の「木ざはしや」を珍夕にとられたというのだ。

「木ざはし」の読みはキザワシ。木膳・木淡など、木が当てられ、木練・木ざらしともいい、木になつたまま甘くなる柿をいう。昔、とくに寒い地方では柿といえば渋柿がほとんどだつたらしく、柿の上で甘くなる柿を珍重してこう呼んだ。この「木ざはしや」を珍夕にとられたというのは、之道編「江鯉子」(元禄3刊)に見られる門弟珍夕(珍碩・酒亭)の次の句のことらしい。

柿柿や鞠のかかりの見ゆる家 珍夕

「木ざはし」は「江鯉子」においても、ふりがながほどこしてあるので、当時としてもやや珍しい言葉だつたことがわかる。といつても、古くからの季寄せや歳時記の類にも見られる季語だから、芭蕉と珍夕の間でやりとりするといつたものではないし、珍夕が専有できるものでもない。

曲水宛の芭蕉書簡は、冒頭に正秀・珍夕の両吟連句を絶賛し、とくに珍夕の上達を喜ぶことから書きはじめられている。「珍夕にとられ候」も珍夕に対する愛情のこもった軽口なのだ。芭蕉としては、珍しい季語「木ざはし」を使つていい句ができたと思つていた。しかし珍夕の句の中にその季語を見つけたので、珍夕にゆずる気持ちで、自分の句からそれを削つて、そのことをおもしろく「珍夕にとられ候」といつた。自分の句に「木ざはし」があれば珍夕の「木ざはし」が目立たない。へたをすると珍夕は、師匠の真似をしたといわれる。芭蕉は珍夕の「木ざはし」が引き立つように自分の「木ざはし」を削除した。弟子思いの話なのだが、芭蕉が冗談めかしていつたのは、珍夕への親しみであるろうし、珍夕の気持ちに余計な負担をかけないようにとの、思いやりでもあるだろう。芭蕉の洒落な心遣いだ。

芭蕉は「木ざはし」の代わりを考えて、「木ざはしや」を「桐の木」に改め、下五の「坪の内」を「堀の内」にして、「猿蓑」(元禄4刊)に見られる次の句になつた。

桐の木にうづら鳴くなる堀の内 ㉡ 芭蕉

これはもともと師弟間の、ちょっと話、といつたものだが、別の角度から考えてみると、芭蕉の等類論に通じるところがある。芭蕉は珍しい季語「木ざはし」を生かしていい句ができたと思つていた。ところが、珍夕の句に「木ざはし」を発見した。自分と同じ季語を選んだ門弟の成長ぶりを嬉しく思うと

2 次のうち、本文中の ㉠ に入れるのに最も適していることばはどれか。一つ選び、記号を○で囲みなさい。

ア 新たな季語を探索する姿勢

イ 珍しい季語を用いることへの執着

ウ 類句・類想に関する厳しい自省の相貌

エ 類句・類想を逆手にとつた秀句の完成

3 本文中の㉠で示した句から㉡で示した句へと作品の再生をはかったことについて、本文中で筆者が述べている内容を次のようにまとめた。

㉠ a、㉡ b に入れるのに最も適しているひとつづきのことばを、それぞれ本文中から抜き出しなさい。ただし、a は十八字、b は六字で抜き出し、それぞれ初めの五字を書きなさい。

㉠の句から㉡の句への作品の再生においては、a が見られ、b のようでも、句の焦点が際立ち、品位が上がっている。

二 次は、白居易という唐の詩人の「三五夜中新月色 一千里外故人心」という詩句についての筆者(篤好)の考えが述べられた文章である。これを読んで、あとの問いに答えなさい。

三五夜中新月色といふ詩句の新月とは、いかなる月の事ぞと、一儒生に問ひしかば、山端より今さし出でたる月をいふ也といへり。さもある事は知らねど、篤好がおもふ所はこと也。此の次句「一千里外故人心」といへるは、今山端より出でたるを見ての情とは聞こえず。月大空に照りわたりて、一天に塵ばかりの雲もなく、澄み渡りたる深夜のさま、身にしてみても千里外の人も、此の月を見るらむと思ひ出でられたる情に聞こゆる也。されば新月とは今夜の月のさやけさたぐひなければ、昨日まで見し月にはあらで、今夜新たに出来たる月なりと思ふ情を、おもはせたる詞なるべし。さるは清しとまさやけしともいひては、猶尋常の事になりて、今夜の月のさやけさはいはむ言のなければ、新月といはれたる。実に妙といふべし。

同時に、いささか得意な珍しい季語が使われてしまったことが残念だつた。せつかく輝いて見えた季語も、やや色褪せて感じられた。もう捨てていい。そこをどこをやや拡大して考えれば、自分の類句を作られてしまったので、自分の句を捨ててしまふことに似ている。芭蕉は、人に使われたことで「木ざはし」の鮮度を見限り、それを捨てて他の言葉で作品の再生をはかった。ちょっと、それを機会として新しい創造に踏み出すしたかな作句根性がかくされている。

芭蕉は「木ざはしや」を「桐の木」に改めた。芭蕉の句はもともと「木ざはし」と「うづら」の季重なりだつたから、季語の「木ざはし」を無季の「桐の木」に替えてもさしつかえない。句の重心を季語の「うづら」に移すために、「木ざはし」を強調していた「や」を「に」に改める。「坪の内」を「桐の木」にふさわしい「堀の内」に変える。わずかな変更のようでも、句の焦点がくつきり際立ち、品位が上がる。言葉を変えらることによって気持ちを高め、句を高める。そこには芭蕉独特の、俳句をずり上げていくような推敲の様態が見られる。珍夕の「木ざはし」という類句にも相当するものの出現によって、芭蕉の句は言葉の入れ替えを余儀なくされた。それが句の推敲をうながし、より良い句の出現をもたらす。

(山下一海「山下一海著作集」による)

(注) 曲水 江戸時代の俳人。 珍夕(珍碩・酒亭) 江戸時代の俳人。 之道 江戸時代の俳人。 正秀 江戸時代の俳人。 等類 ここでは、連歌などにおいて、先行の作と似た趣向・表現のものをつくること。 とやそのような作品のこと。

『山下一海著作集 別巻』

1 珍夕にとられ候とあるが、芭蕉がこのように表現したことについて、本文中で筆者が述べている内容を次のようにまとめた。

㉠ a に入れる内容を、本文中のことばを使って四十五字以上、五十五字以内で書きなさい。また、b に入れるのに最も適しているひとつづきのことばを、本文中から九字で抜き出し、初めの五字を書きなさい。

芭蕉は a ということを、珍夕に対する心遣いから「珍夕にとられ候」という b で表現した。

(注) 三五夜 陰曆の十五日の後、特に、八月十五日の中秋の名月の夜。

新月 ここでは、十五夜の月のこと。

篤好 五十嵐篤好、江戸時代の国学者。

一千里 非常に遠くはなれていること。 故人 古くからの友人。

『日本随筆大成(第二期)』6 吉川弘文館

1 儒生に問ひしかばとあるが、次のうち、ある儒生に対して問うたことの内容として、本文中で述べられているものはどれか。最も適しているものを一つ選び、記号を○で囲みなさい。

ア 三五夜に出ている月を新月ということ。

イ 三五夜に出ている新月はどのような様子であつたかということ。

ウ 三五夜中新月色という詩句の新月はどのような月かということ。

エ 三五夜中新月色という詩句の新月はどこから出る月かということ。

2 此の次句「一千里外故人心」とあるが、本文中で筆者は、この句にはどのような気持ちが表れていると述べているか。次のうち、最も適しているものを一つ選び、記号を○で囲みなさい。

ア 月が大空に照り渡り、少しの雲もなく澄み渡った夜の様子に感じ入り、遠方にいる友人にもこの月を見せてあげたかと思ふ気持ち。

イ 月が大空に照り渡り、少しの雲もなく澄み渡った夜の様子に感じ入り、遠方にいる友人もこの月を見ているのであろうと思ひ出された気持ち。

ウ 月が大空に照り渡り、少しの雲もなく澄み渡った夜の様子に感じ入りながら、遠方にいる友人とかつて一緒に見た月には及ばないと思ふ気持ち。

エ 月が大空に照り渡り、少しの雲もなく澄み渡った夜の様子に感じ入りながら、遠方にいる友人とかつて一緒に月を見たことが思い出された気持ち。

3 本文中で述べられている、「新月」ということばについての筆者の考えを次のようにまとめた。

㉠ a に入れるのに最も適しているひとつづきのことばを、本文中から四字で抜き出しなさい。また、b に入れる内容を本文中から読み取って、現代のことばで二十字以上、三十字以内で書きなさい。

今夜の月の様子は、「明るく澄んだ」などと表現すると、a になり、その月の様子を言い表しきれないことから「新月」と表現したことが非常に優れており、今夜の月の様子が他に並ぶものがないはずばらしく、b と思う気持ちが感じられる。

三 次の問いに答えなさい。

1 次の(1)～(3)の文中の傍線を付けた漢字の読み方を書きなさい。また、(4)～(6)の文中の傍線を付けたカタカナを漢字になおし、解答欄の枠内に書きなさい。ただし、漢字は楷書で、大きくていねいに書くこと。

- (1) 高い目標を掲げる。
- (2) 含蓄のある文章。
- (3) 珠玉の短編。
- (4) 専門リョウイキを広げる。
- (5) タントウ直人に質問する。
- (6) チームのカナメとなる選手。

2 次のうち、返り点にしたがって読むと「見る所期する所は、遠く且た大ならざるべからず。」の読み方になる漢文はどれか。一つ選び、記号を○で囲みなよ。

- ア 所見所期不遠且大。
- イ 所見所期不可遠且大。
- ウ 所見所期不可遠且大。
- エ 所見所期不可遠且大。

四 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

掲お  
 のて  
 への  
 掲お  
 者らでえ  
 権か点控す。  
 考慮時をま  
 著配現載り

著作権者への配慮から現時点での掲載を  
 控えております。

1 次のうち、と熟語の構成が同じものはどれか。一つ選び、記号を○で囲みなさい。

- ア 経緯
- イ 造幣
- ウ 過程
- エ 痕跡

2 とあるが、本文中で筆者がどのように述べる理由を次のようにまとめた。に入れるのに最も適しているひとつづきのことばを、本文中から十二字で抜き出し、初めの五字を書きなさい。

平城京の物理的な空間構造はある程度推察されており、法隆寺や東大寺などの寺院建築は昔の面影を伝えているが、から。

3 とあるが、本文中で筆者は、文学の中の都市と建築の空間表現において、言葉はどのようなものであると説明しているか。その内容についてまとめた次の文のに入る内容を、言葉が具体的に何を伝えようとするかを明らかにして、本文中のことばを使って八十文字以上、九十五文字以内で書きなさい。

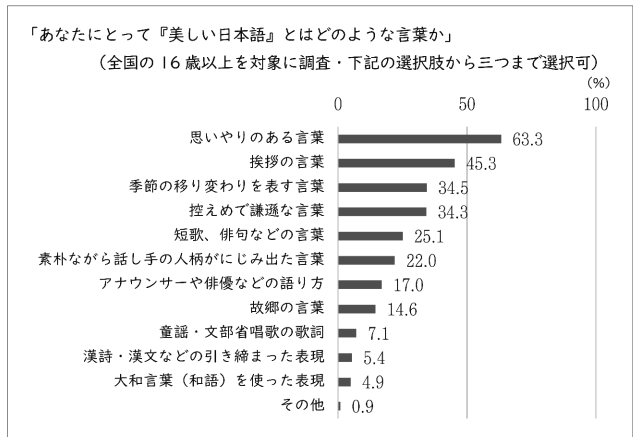
言葉は、ものである。

4 次のうち、本文中で述べられていることがらと内容の合うものはどれか。最も適しているものを一つ選び、記号を○で囲みなさい。

- ア 文学の中の都市と建築の空間についての研究で用いるデータは、文学に現れる空間表現を工学的に抽出したものであり、その価値は、『万葉集』のような名文から抽出したものであれば高くなる。
- イ 文学の中の都市と建築の空間についての研究は、文学に現れる都市と建築にかかわる空間表現を建築論的、文学論的、文化論的に分類した上でコンピュータに入力し、考察を進めていくという方法をとる。
- ウ 文学の中から姿を現す空間は、その時代を生きた人間の心象空間であるという意味では人間と空間の関係の真実が表れていると言えるが、虚構の空間であるため、物理的な都市や建築の命脈には及ばない。
- エ 文学の中から姿を現す空間は虚構の空間であるが、ある文化の中で一つの世界を構築し歴史の流れを形成するものであり、現実と相互に絡まりあいなながら、人間の真実としての都市と建築の文化史を織りなしていく。

五 次の【資料】は、「あなたにとって『美しい日本語』とはどのような言葉か」という質問に対する回答結果を示したものです。【資料】からわかることにもふれながら、「美しさを感じる言葉」とはどのようなものかということについてのあなたの考えを、別の原稿用紙に三百字以内で書きなさい。

【資料】



(「国語に関する世論調査」(文化庁)により作成)

受験 番号	番
----------	---

得点	
----	--

〈問題五を除く〉

二									
3								2	1
b						a	ア	ア	
							ア	ア	
							イ	イ	
							ウ	ウ	
							エ	エ	

30  
と  
思  
う  
気  
持  
ち

20

す  
ば  
ら  
し  
く  
、  
他  
に  
並  
ぶ  
も  
の  
が  
な  
い  
ほ  
ど

18						6	4	4	4	採点者記入欄
----	--	--	--	--	--	---	---	---	---	--------

一										
3		2	1							
b	a	ア	b	a						
		ア								
		イ								
		ウ								
		エ								

55  
と  
い  
う  
こ  
と  
を

45

芭蕉は、

22	4	4	4	4	4					6	採点者記入欄
----	---	---	---	---	---	--	--	--	--	---	--------

四											
4	3								2	1	
ア	も の で あ る。									言 葉 は、	ア
イ											イ
ウ											ウ
エ											エ

80

95

19	4									8	4	3	採点者記入欄
----	---	--	--	--	--	--	--	--	--	---	---	---	--------

三						
2	1					
ア	(6)	(5)	(4)	(3)	(2)	(1)
イ				珠	含	掲
ウ	カナメ	タン	リョウ	玉	蓄	げる
エ		トウ	イキ			

11	2	2	2	2	1	1	1	採点者記入欄
----	---	---	---	---	---	---	---	--------

